

オプス・デイ属人区長
アルバロ・デル・ポルティエーリョ司教の思い出

Recuerdo de Álvaro del Portillo
Prelado del Opus Dei

サルバドール・ベルナル 著
Salvador Bernal

中島 貴幸 監修
Takayuki Nakajima

監修者より

聖座は、本年九月二十七日マドリッドにおいてアルバロ・デル・ポルティエーリヨ司教・オプス・デイ
属人区長の列福式を挙行することを決定しました。二〇一四年は、ドン・アルバロ（本書では、スペイ
ン語の敬称を付してこのように表記しています）の生誕百周年、司祭叙階七十周年、帰天二十周年にあ
たっており、さらに、列福の年となりました。この機会に多くの方々にドン・アルバロを知っていただ
きたく、『*Salvador Bernal, Recuerdo de Álvaro del Portillo — Prelado del Opus Dei —, RIALP 1996*』を全訳し
出版することにしました。原書はオプス・デイ創立者が列聖される前に発行されたもので、本書におい
ては、敬称などを現在に合わせて訳しました。

本書の発行にあたり、翻訳、推敲、校正を分担してくださったオプス・デイの方々に紙面を借りて心
より御礼申し上げます。なお、本書における不備はすべて監修者の責任です。

本書を通して、多くの方々にドン・アルバロの人物に触れていただき、信仰生活の糧としていただ
ければ幸いです。

二〇一四年 六月二十五日

（ドン・アルバロの司祭叙階七十周年）

中島貴幸

目次

監修者より	1
まえがき	4
第一章 神の思いがけない呼びかけ	9
第二章 キリスト教的家庭	20
第三章 青年期の始め	28
第四章 趣味の数々	41
第五章 技師として	52
第六章 スペイン内乱	61
第七章 マドリードで、マドリードから	79
第八章 逆境の歲月	91
第九章 司祭	103
第十章 ローマにて	122

目次

第十一章 ピオ十二世からヨハネ・パウロ一世まで	137
第十二章 第二バチカン公会議	151
第十三章 創立者の帰天	167
第十四章 遺志を受け継ぐ	181
第十五章 受け継がれる父性	197
第十六章 人々の救霊への熱意	217
第十七章 使徒職の拡大	234
第十八章 オプス・デイ属人区長	253
第十九章 賢明かつ堅固な牧者	268
第二十章 ホセマリア・エスクリバーの列福式	286
第二十一章 文化と世論に関して	304
第二十二章 司教叙階	317
第二十三章 ヨハネ・パウロ二世の慈愛	328
第二十四章 マリア年	343
第二十五章 神に感謝	360
第二十六章 最終的な三位一体との出会い	377

オプス・デイ属人区長アルバロ・デル・ポルティーリヨ司教は、一九九四年三月二十三日早朝、ローマで逝去しました。私はその知らせをマドリッドで聞いたのは午前九時を少し過ぎた時でした。その時私は、とある新聞社へ午後五時までに届ける記事を書いているところでした。突然の訃報に接し、私の心に湧き上がった感覚は、一九七五年六月二十六日、ホセマリア・エスクリバー・デ・バラゲル師が帰天した時に感じたものを思い出させました。「涙を祈りに変えて」と題して私が十九年前に発表した新聞記事を確認したところ、その記事の書き出しの言葉が、私の思いを的確に表現していることに気付いたので。

「友の死に接すると、悲しみの陰が生じ、甘美に浸っていた心は苦渋を味わう。」これは、幸せを希求する人間の心とそれを満たすことのない現世を深く見据えていた聖アウグスチヌスが『告白』に書いた言葉です。三月のあの朝、私の心情を言い表すために、これ以上に適切な言葉を見つけることはできなかったのです。もう二度とあの優しい姿を目にすることができないという現実を受け入れるにつれて、その印象は鋭くなっていったのです。数えきれないほどの戦いに全精力をつ

ぎ込み、惜しげもなく愛情を注ぎ、愛する者特有の心の若さを失うことの決してなかった人、その姿を見ることは決してないという辛さでした。

私は、一九七八年以来、その死の少し前までドン・アルバロの傍らで多くの時間を過ごしました。ローマでの普段の仕事から離れて仕事と休息のために、他の人たちと一緒に多くの夏をドン・アルバロと共に過ごし、永遠の都ローマにもしばしば訪れ、オプス・デイ属人区長であった彼から依頼された仕事に従事したものです。私は、ドン・アルバロの優しく逞しい姿を人々に伝える必要を感じ始めました。隠れて過ごすことを望み、オプス・デイ創立者の後ろに姿を隠していたドン・アルバロ、私的信心の祈りに記されているように「真に忠実な子・後継者」であった人を、多くの人々に知ってもらいたという望みが湧いてきたのです。

一九七六年十月、私は、オプス・デイ創立者の生涯について書いた本を上梓し、多くの方々に読んでいただくことができました。今、彼との思い出を出版するに当たり、読者に知っていただけだったのは、他の出来事や客観的な資料に言及はしますが、この書は主に私自身の思い出と個人的な体験をもとに書いたという点です。目撃した一連の出来事から得たヒントを基にして、それらをドン・アルバロの生涯の決定的な時を中心にしてまとめつもりです。

もう一つ、あらかじめ申し上げておきたいこと、それはこの書がオプス・デイの歴史とその創立者についていくばくかの知識を前提としている点です。ただし、私が述べる話や印象の背景を明らかにするために少しばかりの説明は加えるつもりです。ごく稀に、私自身の思い出を補って正確を

期するため、信頼できる証言や書物、公文書、さらに、ドン・アルバロ自身の書いた文書に現れる自伝的な逸話を引用しています。ドン・アルバロが自らについて語る時は、ユーモアのセンスから話題にしたか、あるいは、創立者の姿を正確に示すためにどうしても自ら関与したことを述べる必要がある場合に限られていました。確かなことは、忠実という人間的でありキリスト教的な徳こそ、ドン・アルバロの生涯を要約しているということ。彼の生きた忠実は、ごく自然であり、かつ、英雄的なものでした。

さらに、私が一九七六年八月にドン・アルバロから学んだことを常に脳裏に浮かべながら書いたことを言い添えたいと思います。それは、ドン・アルバロが当時取り掛かっていた聖ホセマリアの生涯を記述する際に、彼が立てていた方針のようなものです。ドン・アルバロは、その記述に際して、創立者の生涯を通して、対神徳と自然徳が日毎より英雄的に実践されていたことを浮き彫りにしようと考えていたのです。そのためには、実際の出来事を述べるものが大切であると考えていました。しかし同時に、比較的最近になってオプス・デイに近づいた人たちや創立者と接したのではない人々が、聖ホセマリアの深い聖性に目を向けず、出来事ばかりを追うことがないよう注意を払っていたのです。

ドン・アルバロについて書くに当たっても同じ点に注意をしなければなりません。ドン・アルバロは、変わったことも人の耳目をそばだたせるようなこともせず、完徳の頂点に到達した人、謙遜な人々の特長である「通常の賜物」を身に帯びた生涯を生き抜いたからです。一九八五年のある夜、

アストウリアスにあるソラビエヤという研修センターで私は次のように書き記しました。「また一日が終わった。すべてにおいて普通の日、静かな雰囲気の中で、祈りと仕事に過ごした日、ドン・アルバロと一緒に過ごす時はいつもそうだ。」ドン・アルバロは、社会の中における聖性というオプス・デイの在俗性を模範的と言えるほど自分のものとしていました。それゆえ、聖ホセマリアが語る聖母についての言葉が、ドン・アルバロにおいて見事に実現しているように思えました。「多くの人々が平凡で、さほど大切でないと決めてかかっているごく些細なことがら、たとえば、日常の仕事や親しい人々への細やかな心づかい、親戚や友人との話し合いや訪問などを、マリアは聖化したのです。平凡こそ称えられるべきなのです。神の愛でみだされることが出来るのです」(『知識の香』一四八番)。

ドン・アルバロが中心となった思い出を振り返ると、私の記憶の中で対極的な概念が融合するのを感じます。たとえば、自然な超自然性、日常の中の英雄性、特別な通常性などが浮かんできます。彼が恩恵に応えた結果、平凡で日常的な状況が聖なるもの、神的なものに変わったと私は心から信じています。オプス・デイ創立者の言葉を使えば、「日常の散文を英雄詩に変えた」のです。日常生活の小さなことに、永遠の響きを持たせたのです。しかも、ドン・アルバロには、深い謙遜から溢れる、柔和で自己を省みない態度が伴っていました。そこには、神の人となった者に伴う逆説を見出すことができます。聖ホセマリアが教えたように、イエスのみが輝くために自らは隠れば隠れるほど、人々はその人物の「すさまじい謙遜」に気づくのです。

ドン・アルバロが死去してからかなりの時が経ちました。彼を知った人々が異口同音に言うこと、それはドン・アルバロが根本的に忠実、善良、愛情に満ちた人であったという点です。ヨハネ・パウロ二世教皇（本年四月二十七日に列聖）の秘書であったスタニスラオ・ジヴィツ枢機卿の感想はこの点を要約しています。ポーランド語に訳されたドン・アルバロの信心カードを初めて手にした時、「本当に善い司教だった」と述懐されたのでした。

神との一致のうちに生きたドン・アルバロは、平和と落ち着きを人々にも伝えて行きました。彼の生涯の円熟期に感じ取ることのできた善良さと均衡のとれた平静さ、言いかえれば眩いばかりの落ち着きは、持つて生まれた気質によるのではなく、神の恩恵に素直に応えるために自己と戦い続けた結果であり、従って、意志と知性が性格に対して勝利を収めた結果であると言えるでしょう。この書では、ドン・アルバロの際立った姿を描き出すことを目指したつもりです。優しさ、堅固さ、忠誠心、忍耐強さ、逞しさ、勇敢さ、大胆さ、自己への厳しさと他者への包容力……。これらの諸徳を生きていたドン・アルバロは、大きな困難においても、平和と忠実の人だったのです。このような特徴が、教会に仕えた模範的な牧者の姿へと結実していったのでした。

第一章 神の思いがけない呼びかけ

一九九三年七月六日、私は、ドン・アルバロと一緒にいました。師はスペインでしばらく過ごしたためローマから着いたばかりでした。その日は、ドン・アルバロがオプス・デイへの加入を願い出た記念日の前日でした。そのことを私が話題にすると、ドン・アルバロは即座にこう言いました。

「なんとという長い年月。神が私に要求される勘定の莫大なこと。私には皆の多くの祈りが必要です。」

この言葉は、ドン・アルバロがずっと心の中に暖めていた考えであると私には思えました。

翌朝、ミサの後、私たちは再び一九三五年七月七日のことを話題にしました。あの日、ドン・アルバロはマドリッドのフェラス学生寮で聖ホセマリアが指導した黙想会に参加していました。当人は、オプス・デイへの加入を申し出た時刻までは覚えていませんでしたが、二番目の説教の後のことでした（当時、聖ホセマリアは毎月の黙想会では、午前中に三つ、午後二つの説教をしています）。ドン・アルバロはユーモアを込めて、自分に召し出しの話をした人はフライングを犯したと語りました。なぜなら、聖ホセマリアはその人に午後まで待つようにと言っていたからです。しかし、「その説教で語られた神への愛と聖母への愛が、私の心を打ちのめしたのです。」

聖霊が彼の心に注いだあの新たな心の動揺について、ドン・アルバロは多くは語りませんでした。その時から彼の真の人生が始まったのでした。その日、その時まで、神が自分をオプス・デイに招いていると予感させるものは何もなかったと、ある時には口にしていました。敬虔なキリスト教の家庭に育ったドン・アルバロは、ほぼ毎日、聖体拝領をし、日々ロザリオを唱えていましたが、信心会や教会の様々な団体に興味を引かれるタイプではなかったのです。自分のオプス・デイへの召し出しの経緯を次のように要約していました。「私たちの創立者の信頼に満ちた粘り強い祈りの歴史だったので。創立者は、私の叔母の一人が私について話すのを聞いただけで、まだ知らない私のために四年間に渡って祈り続けたのです。主が私にこの偉大な恵み、神が与えることのできる信仰の次に最も大きな恵みをお与えくださるよう祈り続けられたのでした。」

その叔母の名はカルメン・デル・ポルティーリョと言い、アルバロの洗礼の代母でもありました。彼女は妹のピラールと一緒に住んでいました。その住まいは、アルバロの家族が住んでいたマドリードのコンデ・デ・アラランダ通りの同じ建物にありました。この二人の姉妹は、共に独身で、信仰が篤く、家の中に聖ヨセフと無原罪の聖母の立派なご像を備えた聖堂を持っていました。複数の慈善事業に協力し、なかでも使徒的婦人会が手掛けている病人援護会の仕事を助けていました。二人の叔母は、イエズス会のホセ・マリア・ルビオ神父（二〇〇三年に列聖）をよく知っていました。ルビオ神父は、ルス・ロドリゲス・カサノバ女史が創立した使徒的婦人会の設立に深く関わった司祭です。間もなく、病人援護会の聖堂付司祭をしていた聖ホセマリア・エスクリバー神父とも知り合

いになり、自分たちの甥について師に話したのでした。

アルバロがオプス・デイ創立者を知ったのは、叔母たちを通してではなく、工学部土木科の先輩であったマヌエル・ペレス・サンチェスを通じてです。マヌエルは、土木科と建築科の学生が中心になって行っていた聖ビンセンシオ・ア・パウロ会の活動にアルバロも協力するよう招いたのでした。

アルバロがこの活動に興味を示すと、マヌエルは活動の主旨を説明しました。また、プエンテ・デ・バジェカスにあるサン・ラモン教会を拠点に、年配者たちに交じって五、六人の学生が「ラ・アカシア」という建物を使ってこの活動をしているが、より活発にするために、若者だけからなるもう一つのグループを結成したことを説明しました。このグループに属していたギリェルモ・ヘスタ・デ・ピケルによると、ブリキと段ボール紙からできたあばら屋が建ち並ぶ地域にサン・ラモン教会は建っていたのです。この聖ビンセンシオ・ア・パウロ会は、金銭の施しや、食料の配給券、医薬品などを届けたり、出張診察を行っていました。

マヌエルとの話の後で、アルバロは毎週土曜日の午後、ベロニカ通りにあった会の本部での集まりに出席するようになりました。そこで出席者たちは霊的読書をした後で、その週に行った訪問から得た情報を交換し合い、次の週に訪問できる家族や個人とどのように関わるかを細かく話し合いました。いつも二人一組で出かけました。アルバロはしばしばマヌエルと一緒に行動しました。同じ土木科の学生だったので時間を合わせ易かったからです。

マヌエルは、「最初から、アルバロはあの活動に熱心に関わっていました。何よりも、子どもた

ちに注ぐ彼の愛情と優しさは群を抜いていました」と、思い出を語っています。

このグループには、アンヘル・ベガス、アルフレド・ピケル、ギリエルモ・ヘスタ・デ・ピケルとその兄弟で一九三六年に殉教する福者ヘス・ヘスタ・デ・ピケルがいました。アンヘルによればこの他にも、カルロス・バルデス・ルイス、セサル・グランダ、フロレンシオ・カバジェロ、カンプーリオ侯爵ホセ・マリア・イ・アルフォンソ・チョコ・デ・グスマン、その従兄弟ラファエル・モレノも参加していました。彼らは様々な学部で、マドリードの最も場末の人間の住む場所とは言えないような地区で、しかも、しばしば教会への敵意をむき出しにする環境の中で、慈善活動を繰り広げていたのです。

後にマドリード大学・政治経済学部の教授となったアンヘル・ベガスは、霊的にも人間的にも向上心に満ちたグループのことを懐かしく思い出しています。なかでも、アルバロ・デル・ポルティーリヨには驚かされたと言います。

「人柄がよく、賢いことでも評判でした。一緒に、貧しい人たちのための活動に取り組んでいましたが、彼は文字どおり模範的に働いていました。彼の人柄には、とにかく驚くばかりでした。学校では最も優秀な学生の一人でしたが、親しみやすく自然で、賢くて、明るく、教養があり、愛嬌があつて、優しく、そして、とりわけ私の目を引いたのが、非常に謙遜だったことです。彼のさわだった謙遜は、彼の愛情と優しさ、神への愛として、今でも私の心に刻み込まれています。」

言うまでもなく、慈善活動の現実、牧歌的なものではありません。これについて私は、デル・

ポルティーリヨ家で長年働いたメルセデス・サンタマリアから一九五〇年代の末に聞いて知っていました。私が彼女を知ったのは、セゴビアのラ・グランハ・デ・サン・イルデフォンソの彼女の実家でのことでした。彼女は貴族的な雰囲気のある白髪の女性でした。私の母はグランハで教師をしており、メルセデスの娘カルメン・フェルナンデスは教え子であった上、私の両親の家で結婚するまで働いていたのです。このような関係から、メルセデスと私たちの家族は親しかったのです。後に、メルセデスは私がオプス・デイのメンバーになったことを知り、深い愛情をもってドン・アルバロについて話してくれたのです。「あの人は今、ローマで教皇様のそばで働いておられます」と何度も繰り返しながら、教皇ヨハネ二十三世（本年四月二十七日に列聖）と聖ホセマリアと一緒に撮影された写真を得意げに見せてくれました。

メルセデスは一九三〇年代のアルバロを鮮明に覚えていました。最も印象に残っていた思い出の一つは、ある日曜日、アルバロが背広を血に染め、頭に大けがを負って帰宅した時のことでした。様々な資料によれば、その事件は一九三四年二月四日に起きました。両親は外出中で、彼は小さい弟たちを驚かせないために、転んだだけだと言ったのです。その日マドリードには雪が降っていたので、彼女は別に不思議に思わなかったのですが、傷の深いことに気がつき、クラウディオ・コエリヨ通りの救急病院まで付き添ったのです。

その際の処置はお粗末なものでした。メルセデスはすぐに不審を抱きました。と言うのは、怪我人を診た衛生職員は、蓋もせずポケットに入れていたチューブの薬を傷口に無造作に塗ったから

です。その後、傷口は化膿し、アルバロはしばらく高熱を発し病床に伏すことになったのです。その治療のために毎日医者に通っていました。本人は不平を口にしませんでしたが、その治療は痛みを伴うものであったはずです。

アルバロはその出来事について多くを語りませんでした。しかし、とうとう家族はそれがサン・ラモン小教区の要理教育の際に他の友人たちとともに被った暴力行為のためだと知ることになります。あの日、約十五人の暴徒が彼らを待ち伏せしていたのです。近くのバルコニーから出来事を見物しようと待っていた者たちがいたことを見ると、この襲撃は前もって準備されたものでした。アルバロはモンキースパナで首筋に深い傷を負わされました。ある者はほとんど耳を引きちぎられました。一九八七年、マニラでドン・アルバロは少しばかり当時の様子を語りました。「幸いに近くに地下鉄の駅がありました。私たちはそこに逃げ込んだちようどその時、電車が駅に入ってきてきました。それに乗り込むと、ドアが閉まったので、私たちは間一髪で助かりました。」

神はマドリードの貧しい人々に示した寛大なアルバロを次第にオプス・デイへと導いて行かれたのでした。一九三五年のある日、アルバロは数名の学友が何かについて話しているのに気づきました。何を話し合っているのか気になり、問いかけると、それはホセマリア・エスクリバーという神父について、またその司祭が進めている使徒職についてだと彼らは説明しました。その答えを聞いたアルバロは、自分にもその神父を紹介して欲しいと頼みました。後年、マヌエルはその経緯を詳しく語っています。その日、彼らはアローヨ・デル・アブロンイガルに住む貧しい家族を訪問しよ

うとしていたのです。現在はバリオ・デ・ラ・エストレーリヤと呼ばれる地区の小麦や大麦の畑の間を歩きながら、彼はアルバロに、オプス・デイ創立者について話したのでした。彼らはこの司祭を単にパドレ（父という意味。司祭に対しても使われる）と呼んでいました。そして、マヌエルは、アルバロと一緒に会いに行こうと誘ったのでした。

すでにアルバロは堅実なキリスト信者としての生活を送っていました。しかし、司祭と頻繁に接触することも、神に自己を奉献する道への予感を感じることもなかったのです。聖ホセマリアとの初めての出会いは、強く彼の心を打ちました。一九七五年、ローマでその思い出を語っています。

「会うなり私に尋ねたのです。『君の名前はなんと言うのですか。君はカルメン・デル・ポルテイリーヨの甥ですか』と。このカルメンという女性は、私の叔母であり洗礼の代母でもありました。高齢でなくなったのですが、マドリードの貧しい地区の病人の世話をする活動で大いにパドレを助けた人です。彼女はパドレに、とても賢い甥がいると話していたのです。それでパドレは、叔母が語った小さな逸話と一緒に私のことを覚えていたのです。叔母はパドレに、私が小さい時からバナナ（スペイン語で「プラタノス」）がとても好きだったこと、しかし、その言葉をよく発音できず、「パラタノス」（傍点は訳者による）と言っていたことを話していました。それでパドレは、『では、君はパラタノスがとても好きなあの子だね』と付け加えたのです。」

わずか五分ほどの短い出会いであったにもかかわらず、大きな愛情をもって真剣に対応してくれたオプス・デイ創立者の姿がアルバロの心に残りました。創立者は、別の機会にゆっくり話したい

と言つて手帳を取り出し、四、五日後に再び会うことを約束したのです。しかし、アルバロがその日に行つてみると、創立者は不在だったのです。

「私との約束をすっぱかしました」と後に笑いながらドン・アルバロは語っています。「急に臨終の人の世話に呼ばれたようでした。私が電話番号を覚えておかなかったので、知らせることができなかったのです。」

それにも関わらず、あの若い司祭の印象はアルバロの心に刻まれました。それから数カ月後、一九三四年―一九三五年の学年が終わりに近づき、夏休みに避暑地に行くことになった時、マドリ―ドを離れる前にパドレへ挨拶に行こうという考えが浮かんできました。

「パドレは私を迎えてくださり、いろんな事について落ち着いて話しました。話の終わりに、『明日、黙想会があるけれど、休暇に出かける前に一度参加したらどうか』と誘われたのです。それは土曜日のことでした。あまりありがたいとは思わなかったのですが、私は断れませんでした。何のことか分からなかったのです。」

フェラス学生寮で行われたその黙想会の間、アルバロは思いもしなかった神の呼びかけをはっきり感じ、オプス・デイで神に一生を捧げようという決心をしたのです。創立者は、短く手紙を書くことが必要だと説明しました。聖ホセマリアに、「親愛なるパドレ」と呼びかけたのはこの時が初めてのことでした。

それから何十年もたつてから、「ほんの数行、技術者の文体で書いてだけです。『私はオプス・デ

イの精神を知り、所属を希望します』というような内容だつたと思う」と振り返っています。

その三カ月前の三月十一日、アルバロは二十一歳になっていました。

創立者は一九三五年のあの頃には、疲労困憊していたにもかかわらず、アルバロにオプス・デイの精神の基本的な事柄を伝えるために何時間もクラスを行いました。聖ホセマリアが若者たちに授けていたクラスに出たことがなかったので、アルバロだけのための個人授業となりました。

一方、アルバロは夏季休暇に出かけるのを遅らせました。八月になつてラ・グランハに移り両親や兄弟たちと合流しました。創立者はマドリ―ドに残っていました。アルバロはその村にしばらく滞在し、その機会に友人たちとの使徒職を始めました。オプス・デイの精神がもたらした、日常生活におけるキリスト教的生活の大きな展望を伝えて行きました。その結果、一人、また一人と、オプス・デイに加わることを決意する者が出てきました。フェラス学生寮では、寮生や形成の手段に参加していた若者たちが、夏季休暇中も互いの近況を知り合うために、『ノテイシアス』という小冊子を発行していました。タイプライターで書かれた『ノテイシアス』の九月号には、アルバロが「ラ・グランハで聖マルコ福音書の第一章にある有名な漁を試み成功を勝ち得た」と記されています。

一九三五年七月七日を境にして、アルバロの人生は僅かな言葉で表わせます。それはオプス・デイの召し出しへの忠実です。最初から神との約束は一生のことであると自覚していたのです。

「主よ、御身はなんとよいお方でしょう。何とよいお方でしょう。大勢の人の中から、何の功績

もない私に目をとめられ、お選びになられたとは。」一九九一年、バルセロナでドン・アルバロがこう漏らすのを私は耳にしました。

ドン・アルバロの堅忍は、その最初の決心と同じく、心底から自由な行いであり、時に襲ってくる無味乾燥の状態と両立するものでした。オプス・デイの創立五十周年を目前に控えていた時、ドン・アルバロはそのことを召し出しの最初の頃に学んだと屈託なく話しました。

「道を歩み始めた人に神がしばしばなされるように、深い霊的喜びとともに、主は私に受けた召し出しに対する顕著な熱意をお恵みになりました。しかし数カ月すると人間的な熱意は冷めて行き、超自然的な熱意に席を譲りました。私たちの堅忍の土台に常にあるべき熱意のことです。このことをパドレに打ち明けると、パドレは私のいうことを完全に理解してくださり、この対話からパドレのすべての子どもたちに役立つようにと若干の考察を書き残されました。」

そこから『道』の九九四番が生まれたのです。「あなたは私に、『高揚した気分が消えました』と書いてきた。あなたに高揚心があるうとなかろうと、神の愛ゆえに、つまり自己放棄という義務を意識して、働くべきなのだ。」

そしてドン・アルバロは神の呼びかけと人間の応答の意味を簡潔にまとめて、次のように語っています。

「私たちの召し出しは、気持ちや健康状態、職業や家族の状況に左右されるものではありません。人生には浮き沈みや苦しみと喜びがつきものですが、これらの波風を超えたところで召し出しはい

つも夜空の星のように輝き、神への道の方角を指し示しています。これこそ大切ですが、子どもたちよ、これが決定的なものです。私たちに起こりうる他のことはすべて過ぎ去るものです。それを決して忘れないように。」

神の御旨に対する応答を「愛の約束」と理解した聖ホセマリアの教えを自分のものとしていました。誰かを愛すれば、その人は細やかな心で一日を過ごし、犠牲や献身をいとわず、言い訳やけちな態度に流されません。心は、幸せであると同時に、愛する人への自分の献身に決して満足することはありません。人間同士の愛がそうであるのですから、相手が究極の愛である神であるならば、さらに献身への望みに駆り立てられることでしょう。